

多摩川に架かる二子橋を東京側より歩き出す。歩き渡るのは、東日本大震災の日の夕暮れ以来である。あの時は帰宅を急ぐ人の波でこの橋は埋まっていた。

左岸下流側の丘陵や河川敷を眺めていると、昔の記憶がつつぎと頭に浮かんでくる。車や電車の喧噪も気にならない。

五歳の頃、戦時下にも拘らず大森に住んでいた祖父母が二子遊園地に連れて来てくれた。川遊びをさせようと私を抱え浅い瀬に下ろそうとしたが、足を縮め嫌がったという。その際「弱虫」と言われたことが幽かな記憶として残っている。

丸子橋へ続く段丘の先で、昭和二十年代より三十数年間を暮らし、この辺りはホームグラウンドだった。中学時代に川の本流で泳いだことがある。しかしその頃すでに水質が汚れ始めており、早々に引き上げた。以降も汚染は一層進み、堰では泡が飛び跳ね、浄水場は取水を中止した。

やがて地道な環境改善の施策が美り、水質も鮭や鮎が遡上する程になる。この辺りで釣りをしている友人が自宅に招き鮎三味の料理を振舞ってくれた。生き返った川の味は一入だった。

河川敷に巨人軍のグラウンドがあり、主に練習していたのは二軍の選手だった。その中に大巨漢の投手が目についた。後のジャイアント馬場だった。

巨人軍グラウンドが他所へ移転した跡地へは、小学生の息子を連れて行き、左手にグローブ、右手にバットを持ち、ノックしながら野球を教えていた。渡し舟で対岸のゴルフ場に出掛けたこともある。土手で家族一緒に楽しんだサイクリングやマラソンも懐かしい。

今や二子玉川は「ニコタマ」と呼ばれ、老若男女で賑わっている。駅前に玉川高島屋が建ち、遊園地跡にはショッピングモールやオフィスの入った何棟もの高層ビルが聳えている。ビルといえば、以前は小さな富士観会館だけだった。橋も一本のみ、東名や第三京浜、バイパスの橋は無く、大井町線の電車が自動車や人と同じ路面をのろのろと渡っていた。

追想は尽きそうにないが、橋を渡り終えてしまった。